



外国絵本のおはなし会

講師▼スレイマノア・アルピナ・ナイレフナさん
 鳴門教育大学大学院生
 日時▼3月16日(土) 15時～
 会場▼2階ハイビジョンシアター
 内容▼「ウズベキスタンの絵本(ウズベク語)」の読み聞かせ
 ウズベキスタンの文化や学校の様子などの紹介。
 対象▼興味のある方どなたでも参加できます。
申込み不要・入場無料

劇団todokeru, 第四回本公演 幕間ダイアログ

日時▼3月16日(土) ①14時～ ②18時～
 ※開場はそれぞれ30分前を予定。
 上演時間▼100分
 会場▼3階多目的ホール
 入場料▼前売り 一般2,000円、学生500円
 ※当日券は各500円増し
 主催▼劇団todokeru, (オオキ 090-6287-4090)

点字体験教室

日時▼3月30日(土) 14時～16時
 ※開催中、会場内出入り自由
 会場▼2階会議室
 講師▼点訳の会うずのみなさん
 対象▼興味のある方どなたでも参加できます。君にも点
 字が書ける!読める!?パソコンを使った点訳体
 験と手打ちの点訳どちらも体験できます!
申込み不要・入場無料

創世ホール名画鑑賞会 Vol. 39

老後の資金がありません!

日時▼令和6年5月18日(土) ①10時30分～
 ②14時～
 会場▼3階多目的ホール
 入場料▼一般・大学生 前売1,000円
 当日1,300円
 シニア(60歳以上) 1,000円(前売・当日共通)
 小中高生・障がいのある方700円(前売・当日共通)
 ※チケットは図書館カウンターで取扱っています。
 上映作品▼「老後の資金がありません!」(2021年上映作品・115分)
 主催▼創世ホール名画鑑賞会実行委員会



©2021映画『老後の資金がありません!』製作委員会

春休み自習スペース貸出

3月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

上記カレンダーの丸印の日に自習スペースに貸出を行います。詳しくは、北島町ホームページ、館内にあるチラシ等をご覧ください。電話等での予約、座席指定などはできません。ルールを守ってご利用ください。

※創世ホールに来場される方へ※

- ▼入場される方の、マスクの着用は個人の判断に委ねることとしております。
- ▼令和5年5月8日からは座席数制限を解除し、貸しホールイベントについては主催団体等の判断に委ねるものとしています。
- なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

山田太一さんの思い出(下) ●小西昌幸

■山田太一さんは面白い方(愉快的方、おちゃめな方)で、講演会直前のお昼どきに、二人で喫茶店に入り、オムライスを食べたとき、「ほお、オムライスなんて30年ぶりくらいかなあ。あなたはオムライスが好きなんですか」「ええ、そうなんです。オムライスが好物でして」という趣旨の会話になった。そして、やおら、では僕の方が大きいみたいだから交換しましょう、といてお皿を入れ替えた。その後、うーん、やっぱり変わらないなあ、と言って、またお皿を元に戻されたのだった。私は、こんな楽しい山田さんを、一定時間独占できて、とても嬉しかったのだった。

■なおこの時、喫茶店のママさんが山田さんに色紙を差し出して、山田さんは快くサインに応じておられた。そのサインは、今もお店に飾られている。

■山田太一さんの講演会のもようは、地元のケーブルテレビ(キューテレビ)で録画放映された。私は、聞き役として、「早春スケッチブック」の主要な重たいセリフについては、たぶん一通り触れることはできたと思う。放送された映像記録に、対話の全貌は残っている。また「徳島新聞」で2回にわたって記事が掲載された。

■さんざん悩み苦しんだ末、私のこのつたない追悼レポートは、2回に分けて、文章と写真で構成することにした。

■そして、最後に「早春スケッチブック」のラスト部分の言葉を見つめておきたい。それは、次のような内容だ(以下「早春スケッチブック」最終回最終シークエンスからつつしんで引用)。

「…(略)…今の父は、一瞬もしらけた顔など見せず、せい一杯陽気に振舞った。沢田さんも、目が見えず、間もなく死んで行くことなど、毛筋ほども見せなかった。ぼくには、二人が、頑張っ

て自分を越えようとしているように見えた。自分を克服して、自分以上のものになると、はりつめているように見えた」

「そして、はりつめた糸が切れたように、翌朝沢田さんは倒れ、そのまま意識は戻らずに、二日後の三月二十二日に病院で息を引き取った」

「それもぼくには、沢田さんの意志の力のようにも思えるのだった」

「わが家はまた何気ない毎日だった。でも、この三ヶ月がなんでもないはずはなかった」

「少なくとも、ぼくは変らなければならないと思った」

「あるがままに、自然に生きるのではなく、無理をして自分を越えようとする人間の魅力を、忘れたくないと思った」

■講演会の中では、私は当時の自分の力量の問題から、この、「自分を克服する」、「無理をして自分を越えようとする人間の魅力」という視点の重要性について、きちんと明確にできていなかった(とらえきれていなかった)。だから、ここに、山田太一さんの追悼文の中にあえて引用し、記録しておきたいと思う。

■山田太一さんは、講演会のほぼ二年後、2017年1月に脳出血で倒

れられた(ご体調を崩された)ことが報じられた。私は、ただ山田太一さん、ご無事でいてください、と祈ることしかできなかった。

■その後、このたびの訃報の際に、山田さんに長期にわたってインタビューをしている人がおられたことを知った。作品一つ一つに、山田さんが答えているようなものと、私は受け止めた。それは、やがて著作にまとめられることだと思う。

■今年に入って、『映画芸術』『キネマ旬報』『ユリイカ』などで山田太一さんの追悼特集が組まれた。それらを大切に手元に置いて、今は静かに長編インタビューがきちんとまとまり、出版されるであろう日を待ちたい。

■周知のとおり、山田太一さんは寺山修司さんと仲が良かった(大学時代からの親友)。だから、二人の作品の愛好家としては、どうしても天国で二人が再会し、挨拶を交わしている姿を想像したくなる。小西君あんだ、感傷的だなあと笑われるかもしれないが、それでもかまわない。それでも良いから私は、そのように考えたいのだ。

■そして、私はこれからも「早春スケッチブック」を大切にしながら、生きてゆくつもりである。山田太一さん、ありがとうございました。さようなら。(2024年4月5日脱稿)

▼写真は、北島町立図書館カウンター前での追悼展示(2023年12月~2024年2月)。講演会前日と当日の山田太一さん(2015年2月7日と8日)。舞台での写真は高橋和之さん撮影。その他は小西が撮影。

